

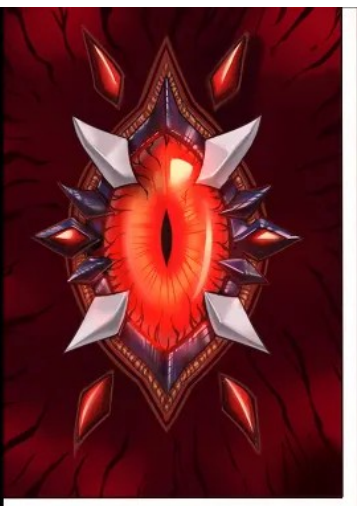


「仲間を逃げるため、一人でわしを挑むはいい度胸だな、娘よ。」

「…私を殺しなさい!」

「ククク…そうはいかないよ。もっと面白いものに見せろ…」

「例えば…この邪眼!」



(…ダメ…これは彼の…術…)

「惜しな、お主のような天才、あの三流チームにいるなんて…
…違…か…う…」

「あんな三流の仲間はまだお主の足を引っ張るだけよ。」

(ちが…でも…彼の言うは本当なら…)

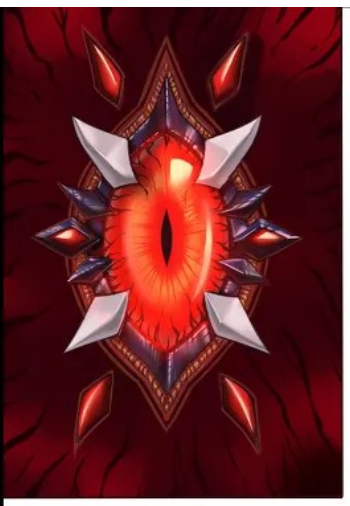
「その仲間たちはお主を捨て、自分だけを逃げるんだ」

「く…」

(わ…わたし何のために戦うの…)

「…その聖なるローブを脱ぎなさい。」

「…はい。」



（ああ…この解放感…心地よいです…）

「クク、魔力だけでなく、体の素質もよい。」

「…ありがとうございます。」

「わしに忠誠を誓えば、お主に相応しい力に与えてる。」

「…力は…弱い者を…守る…」

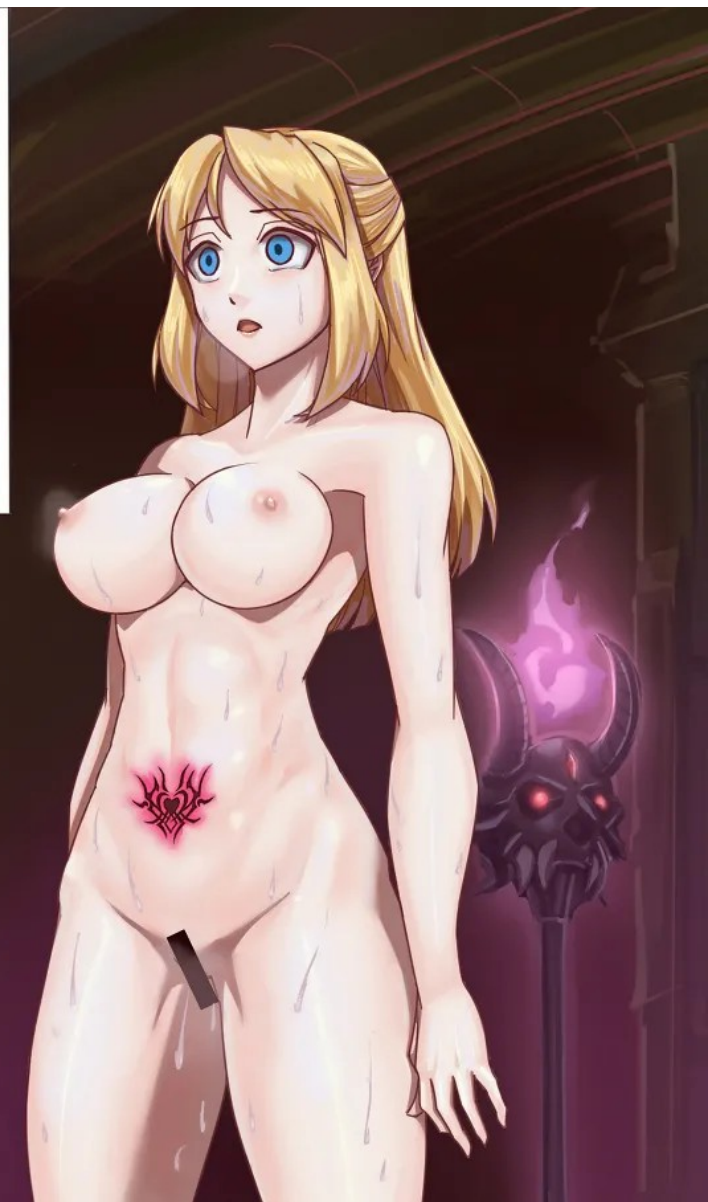
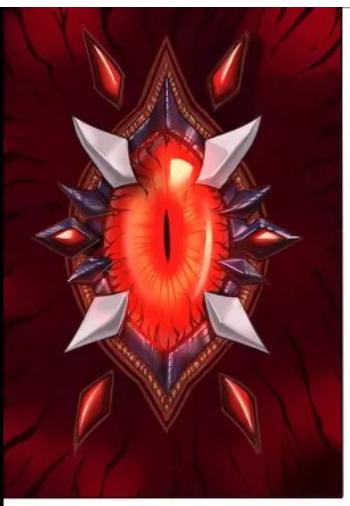
「この世界は弱肉強食、弱者に支配蹂躪のは強者当然のこと。」

「そしてお主は、その資格がある。」

（そ…そうよ…弱者を支配蹂躪…私その資格がある…）

「さあ選べ、弱者のまま死ぬが…それともわしに誓い、強者になろうか？」

「…誓います。」



（ああ…なにこれ「お腹じは燃えてしまう」）

「この邪紋はお主の聖なる魔力を全て邪悪な魔力に変わる」

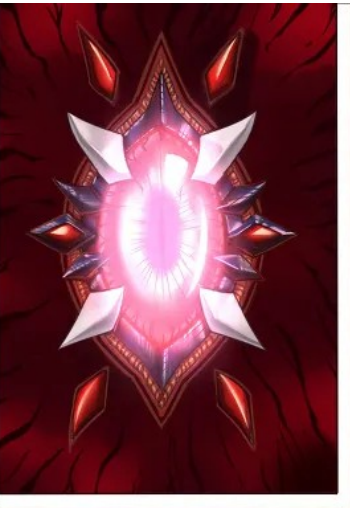
「…いいいや」

「なぜ拒むだ…本当は気持ちいいだろう」

（そ…そうね…凄く気持ちいいなのに…欲しい…もっと欲しい…）

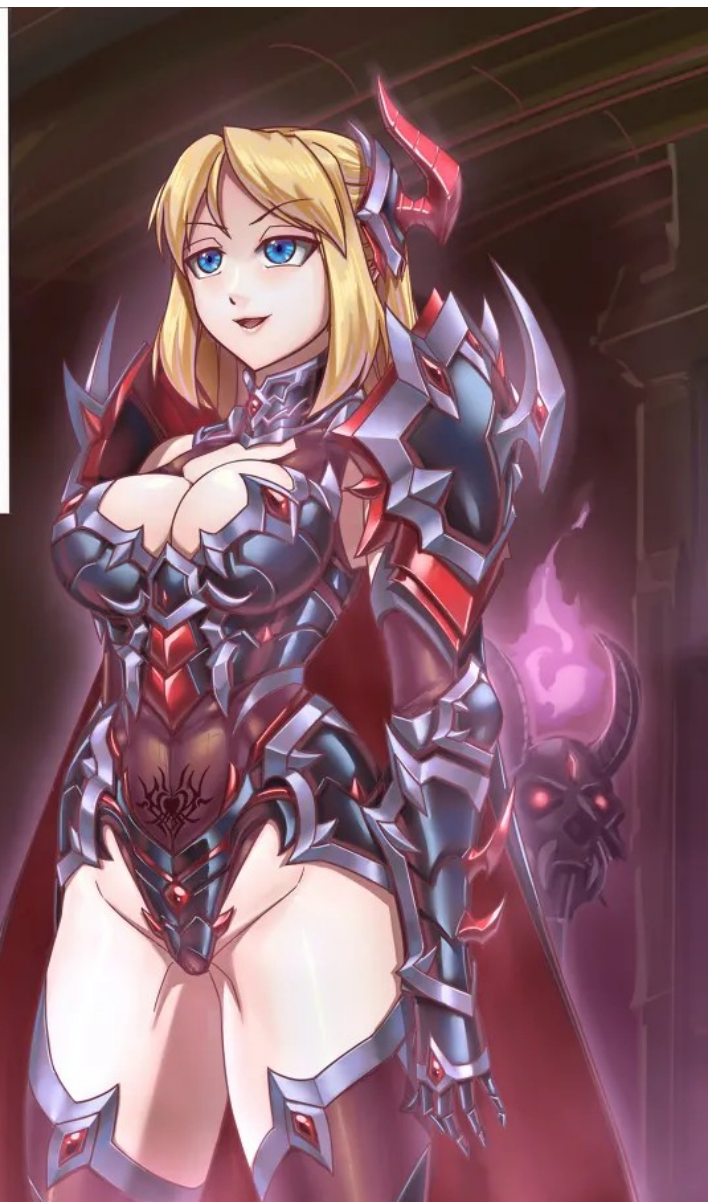
「けけけ…そうだ。力を持つ、弱者を蹂躪のはそんなに気持ちいいだ」

「さあ更に快感を求め…お主の潜在魔力全部引き出すために」



「...気持ちいいの...欲しい...もっと...もっと...もっと...もっと...」
「クク、想像以上の素質だ。さあわしのしもべとして生まれ変わる...」
「イク...う...う...う...」





「目を覚ませ、わしのしもべよ。」
「……はい、魔王様。」
「強者として生まれ変わったのはどんな気分？」
「素晴らしいです。邪悪な魔力は私の体中に流れて、いい気分です」
「その力あれば私は……わたし……」
（あ……あれ、私なぜここにいったの……）
「お主は力を求める、仲間を裏切り、わしの元へ来た、それだけだ。」



「ふふ…そうだ、私は力を求めるため、仲間を捨てる最低女です」

「この力に比べれば、あの三流仲間たちは本当にゴミ以下のものよ。」

「クク、丁度いい。偵査兵もうお主の元仲間を探した。」

「今はお主の力を示す時、さあ行け」

「ええあの三流チームにいったは一生の恥、彼らを必ず抹殺する」

「ふふふ…あははははは」